

日本語文学の越境的な読みに向けて

西 成彦

1. 日本比較文学と日本文学の周縁

幕末の開国以来、日本と海外との人的往来は一気に活発化した。エドワード・S・モースやバジル・ホール・チェンバレン、アーネスト・フェノロサらは、お雇い外国人として日本アカデミズムの立ち上げに貢献したばかりか、欧米世界への日本文化の紹介にも力を尽くした。しかし、そうした来日欧米人のなかから、執筆言語として日本語を選び取るものはあらわれず、日本に帰化して小泉八雲を名乗ったラフカディオ・ハーンですら、そこまで日本語能力を身につけるには至らず、そもそもそうした野心を抱くことがなかった。戦前の日本に、今日のリーベ英雄に相当する人材は登場のしようがなかったのである。

また、日本のアカデミズムが東洋一の評判を得るようになると、アジア諸地域からも留学生が日本に集まるようになった。なかには、東北大学（当時は仙台医学専門学校）で医学を学んだことのある、後の作家、魯迅（本名は周樹人）なども含まれたが、日本語で書くことに未来を託したのは、おもに台湾や朝鮮半島出身者（北海道開拓使の設置後、「旧土人」として日本人に統合されたアイヌ系の知識人や、「琉球処分」後の沖縄県出身者もそこに含まれるかもしれない）にかぎられた。

しかし、かりに日本語を用いる表現者への転生を図ることがなかった場合でも、来日外国人たちは、近代日本を考える上できわめて重要な存在である。比較文学の世界では、欧米もしくはアジアから訪れた知識人の創作や表現に関して、最大限の敬意が払われてきたと思う。日本文学と欧米文学および東アジア文学を架橋したこれらの先達は、ただ比較文学研究にとって格好の対象だというだけでなく、彼ら自身が比較文学者の偉大なる先達であったとも考えられるからだ。日本語と外国語のはざまにあって文学を思考すること。近代日本とその周辺には、そうした知的エリートが続々と誕生したのだった。

旧植民地地域から現われた日本通の知識人は、悪名高い日本植民地主義およびアジア太平洋戦争が幕を閉じたあと、長いあいだ、「親日家」としてのスティグマを背負って生きることを強いられたが、戦後50年を過ぎたあたりから、こうした境界的な知識人に対する関心が、内外でいやましに高まりつつある。

またグローバル化が叫ばれる昨今の現象として、楊逸^{ヤン・イー}やシリル・ネザマフィのような主にアジア地域からのニューカマーが、第一言語ではない日本語を駆使して文壇に登場するケースに注目が集まっている。日本国籍は持たないものの日本語で書き続ける旧植民地出身者やその末裔が担ういわゆる「在日文学」とともに、日本語文学は日本人だけの占有物ではないことが、いままさに証明されようとしている。

他方、開国後の日本からは、数々の日本人が海外に「雄飛」した。江戸時代後期のジョン万

次郎のような漂流者ではなく、なにがしかの意思を持って海を渡り、一時的にであれ、国外に居を定める日本人は増加の一途をたどったのだった。そうした日本人のなかで、日本文学史に名を残しているのは、最終的には帰国して、中央文壇での成功を期したものばかりであった（森鷗外、夏目漱石、永井荷風、高村光太郎、前田河広一郎、谷譲次、石川達三など）が、本来は、北米・南米に渡ったまま現地に残った移民たちの作品群にも然るべき評価のものさしが向けられるべきだろう。これらはすべて日本比較文学にとって格好の素材を提供してきた大きな境界的知識人のグループだからである。

また海外に渡った日本人のなかには、野口米次郎のように日本語以外での創作に挑戦する存在も現われた。今をときめく英語作家カズオ・イシグロ（28歳で英国に帰化）や日・独二言語作家である多和田葉子らを先取りする存在が野口米次郎なのである。その他、すでに日本国籍を持たない南北アメリカの日系作家たちの存在も忘れるべきではないだろう。ジョン・オカダやジョイ・コガワ、カレン・テイ・ヤマシタなどの英語作家は、いまや北米文学の一翼を担う存在だが、彼ら彼女らの闘いは、かつて旧植民地（出身を含む）の非日本人作家と同じく、言語と言語のはざままで生きることを強いられたものたちの闘いを彷彿とさせるものである。そのなかには、かつて「満洲国」時代に小学校教師をしていた女性を母に持つ韓国系アメリカ作家、テレサ・ハッキョン・チャのような存在も含められるかもしれない¹⁾。日本語話者ではない非日本語作家のなかにも、日本語はさまざまな形で重たい影を落としている。日本語と外国語のはざままで文学を考えることを生業とする比較文学者は、各言語圏の文学のなかで「少数派文学」のプレゼンスを担う作家たちの存在をないがしろにするわけにはいかないのである。

そもそも欧米の国民文学と日本文学のあいだの影響関係や対照関係を掘り起こすことから始まった日本比較文学という学問は、こうした日本語と諸外国語の境界領域に芽を吹いた数々の文化現象にも目を向けることを使命として引き受けてきたし、今後もますます、そうでなければならぬ。

2. 「外地の日本語文学」研究とヨーロッパ文学研究者の使命

ところで、すでに触れたように、日本、及びかつてその植民地支配に苦しめられた諸国では、いままさに植民地期の日本語文学研究が花盛りである。東アジアの冷戦状況も災いして、長いあいだ、放置されてきた研究領域が、このところ、遅れを取り戻そうとするかのような活況を呈しているのである。この領域は、かならずしも日本語以外のアジア言語に通じていない者にとっても敷居が低く、近づきやすい領域であるし、日本語に習熟した韓国や台湾の研究者の比較文学者にとって、それはまさに格好の研究素材を提供している。その結果、ここ数十年のあいだには膨大な研究の蓄積があり、またとくに日韓・日台間では共同研究も活発である。

この状況のなかで、韓国語や中国語に堪能な比較文学者が果たすべき役割ははっきりしている。旧植民地の日本語表現者は、つねに現地の言語との隣接性を生きていた。その意味で、そうした隣接性をみずからも生きる研究者にしか踏みこめない「旧植民地」地域の文学研究の世界は無際限である。しかし、ここで忘れてならないのは、同じく広大な植民地を擁した西洋列強の文学を専攻するものもまた、いわゆる「外地文学」の研究に手を伸ばすだけの十分な資格

を有しているということである。

たとえば、植民地期朝鮮の同時代詩を精選して日本語へと翻訳した金素雲の『乳色の雲』(1940)に「朝鮮の詩人等を内地の文壇に迎へんとするの辞」という一文を寄せた佐藤春夫は、今から思えば乱暴としかいいようのない、次のような言葉を書きつけていた。

卿等の廃滅に帰せんとする古の言葉を卿等が最も深く愛しようと思ふならば、宜しく敢然として日常の生活から抛棄し去つてわづかに詩の噴火口からこれを輝やかな光とともに吐くに如くはあるまい。若し夫れたゞ一人のホーマー、一人のゲーテ、一人の杜甫、一人の人麻呂が卿等の間に生れさへすれば、その詩篇のために卿等の失はるべき言葉も世界に研究せられて千古に生きるを妨げないであらう。²⁾

ホーマー、ゲーテ云々はよいとして、朝鮮語(=韓国語)を「廃滅に帰せんとする」言語として定義づけるその乱暴さは、まさしく植民地主義に内在する言語帝国主義のそれ以外のなものでもない。「ポーランド分割」後のポーランド人が危機感を覚えたのは、まさに分割利強の言語であったロシア語やドイツ語の圧迫に対してであったし、アイルランドであれば、英語、アルジェリアであればフランス語の猛威を前にして、ゲール語(アイルランド語)やアラビア語の「尊厳」が失われることに対する不安は、現地ナショナリストの胸中にどっかりと腰を下ろした。しかも、金素雲がおこなった「編訳」の作業は、植民地支配下にあっても韓国語による詩的表現が活発であることの高らかな表明であったはずなのに、内地人・佐藤春夫は、これを「失はるべき」ものに対する鎮魂の先取りででもあるかのように捻じ曲げて文脈化したのだった。たしかに、佐藤の解釈を補強するかのように、同時代の植民地朝鮮からは、日本語を創作言語として用いる表現者が続々とあらわれてきていた。しかし、このような二重言語状況³⁾は、ヨーロッパ文学を専攻する研究者にこそ、目になじんだ風景なのではないだろうか。

アイルランドを例にとれば、そこには、英国国教会系の家庭に生まれながらゲール語に魅了され、「アイルランド文芸復興」に深くかかわったW・B・イエイツのような英語詩人がいるかと思えば、カトリック系の家庭に生まれながら、もっぱら英語を拡張し、英語文学の外部を夢見たジェイムズ・ジョイスのような冒険者もいた。たとえば、そうしたアングロ=アイリッシュ文学に関心を抱くものにとって、たとえば植民地朝鮮の二重言語状況に足場を置いた表現者たちは、きわめて身近な存在であるはずだ。しかし、そういった「比較植民地文学」(仮にそう呼んでおこう)の試みが、日本ではいまだ手探りの段階に留まっている⁴⁾。

同じことは、フランス領インドシナやフランス領北アフリカ(マグリブ地方)の文学についても言える。たとえば、読者のなかには、若いころに『異邦人』を読んで、同時代文学の言い知れぬ魅力にとりつかれた方が少なくないだろう(ほかならぬ私がそうだった)。にもかかわらず、カミュを読みながら植民地朝鮮を考えようとする思考様式が日本に上陸したのは、エドワード・サイードの『文化と植民地主義』(英語版1993、大橋洋一訳の第1巻が1998)の紹介を経て、韓国人の社会言語学者、イ・ヨンスタのカミュ論⁵⁾(初出、1997)が登場した、1990年代だった。それは、ちょうど日本で「外地の日本語文学」⁶⁾に対する関心が高まった時期でもあった。

『異邦人』の第1部は、ひとりのアルジェリア生まれのフランス人が行きがかり上、アラブ人

の男たちに絡まれることになり、思わずその一人を射殺してしまう流れである。主人公のムルソーは、べつに古くからアルジェリアのアラブ人のあいだにフランス人植民者に対する憎悪を感じ取っていたわけではなく、「殺気」を覚えたのは向こうが匕首を手にしているのを見てからだった。しかし、ここには植民地という社会空間がいかに「殺気」の交錯し、跳梁する場であったかが印象的に示されている。

じつは、日本でもすでに大正期に何人かの日本人作家が、植民地支配のお先棒を担ぐ宗主国の人間としての自分のなかにやましさに近いものを感じていることを作中で告白していた。1920年に植民地台湾を旅行した佐藤春夫は、後に歴史にその名を刻まれる凄惨な「霧社事件」(1930)の舞台となる台湾中部の山岳地帯を舞台に紀行文「霧社」(1925)を書き、日本の植民地支配が現地さまざまな遺恨や後腐れを産み出していることに読者の注意を向けた⁷⁾。

また、1919年の「三・一独立運動」がやはり朝鮮総督府によって鎮圧されて間もないころ、朝鮮半島の奥地に拠点を置いていた「排日鮮人団の首魁」⁸⁾と目される人物を日本人青年が興味本位に訪ねていくという設定で短篇小説を残した中西伊之助のような作家もいる。「不逞鮮人」(1922)と題されたこの短篇には、主人公の青年が朝鮮人によって寝首をかかれることを恐れ、朝鮮人の側も青年が火器を携行してないかどうか疑心暗鬼に陥るといふ、一触即発のすれ違いが描かれている。

中西は、さらに、彼自身が1910年代の平壤で新聞記者をしながら日本人資本家を告発して逮捕・収監された際の記憶をもとに、朝鮮人死刑囚の思い出を文学作品の形で定着させようとした長篇『楮土に芽ぐむもの』(1922)を完成させている。『異邦人』の第2部がまさにアルジェリア植民地の刑務所を舞台にすること、またカミュが晩年まで死刑廃止論の論陣を張っていたことを考え合わせると、二人の類似⁹⁾をただの偶然として退けることは難しい。植民地統治にひそむ宗主国人と植民地人のあいだの「非対称」な関係が、市井の日常ばかりでなく、刑務所のような空間のなかにも同じく忍びこんでいたことに、中西とカミュはそれぞれの立場から鋭い洞察を加えていたのである。

じつは、このように植民地帝国の文学相互のあいだに脈絡をつけようとするアイデアは、いまから70年前、若き台湾帝大時代の島田謹二のなかに萌芽的な形で胚胎されていた。台湾で日本文学の独自色を打ち出そうとして悪戦苦闘する西川満らに檄を飛ばすという意図があったのだと思うが、「台湾の文学的過現未」と題されるエッセイのなかで、島田は次のような比較文学者ならではの先見の明を示していた。

広く世界の文学史を見よ。ParisパリやLondonロンドンや東京にのみ文学の美花は咲くのではない。或はProvenceプロヴァンスに、或はIrelandアイルランドに、或はAlgérieアルジェリーに、或はNicaraguaニカラグアに、特異な花卉は生い立った。〔中略〕故に台湾の文学はむしろパリやロンドンの都会文学の模倣ではなく、おのれと同じ立場にある他の外地文学を究め、その功罪を明らかにし、もしそこに学ぶべき点を見出しえ、それらをこそ参考して、独自の文学——少なくとも日本文学史に例類なき、しかも有意義なる現代文学の様式——を創成するがよいと信ずる。¹⁰⁾

この文章が書かれた当時(初出は1941年5月)、カミュはすでにアルジェで新進作家として

頭角を現わそうとしてはいたものの、出世作である『異邦人』がドイツ軍占領下のパリで刊行されるのは翌年のことであった。

戦後の島田は日本における比較文学の発展に大きく寄与した巨人だが、台湾時代に構想した計画にあらためて本腰を入れて取り組むことはもうなかった¹¹⁾。また、上記のエッセイが台湾の「本島人」作家にはいっさい言及していないことをもって、後に『華麗島文学志』(1995)として1冊にまとめられることになる、その「台湾文学研究」を片肺的なものとして退ける風潮がなきにしもあらずである。しかし、そうした毀誉褒貶のなかにあつて、見逃してならないのは、日本のヨーロッパ文学研究者もまた「外地の日本語文学」に対しては、比較文学者というアカデミズムの立場から堂々と介入していけるという島田の強固な信念である¹²⁾。

ここ20年の「外地の日本語文学」ブームでは、たとえば、アルジェリア出身のアラブ系（もしくはベルベル系）のフランス語表現者（そこには哲学者ジャック・デリダも含まれる）を研究対象とするフランス文学者の仕事が、少なからず触媒的なはたらきを示した¹³⁾。アルジェリア独立戦争と朝鮮戦争を重ね合わせながら、アルジェリアのアラブ人作家ムールード・マムリに対してオマージュを捧げた金石範のような在日作家もいた¹⁴⁾。「外地の日本語文学」を考えるときに、「フランス系からアラブ系・ベルベル系まで含めたマグレブ地方のフランス語文学」を視野に入れるアイデアはきわめて妥当、かつ示唆的であり、たとえば、そうした方面でのフランス語圏文学者からの援護射撃がないかぎり、日本の「外地の日本語文学」研究はいずれ手詰まりになるだろうし、比較文学という学問領域の健全な発達もままならないだろう。そして、なにより、そんなことでは島田が浮かばれないだろうと思う。

3. その他のヨーロッパ文学研究者に与えたい課題

以上、ヨーロッパ（とくに英・仏）文学研究者の「外地の日本語文学」研究に対する参画を促すアピールを書かせていただいたが、この機会に、ここは自分たちの出る幕ではないと考えていらっしやるかもしれないその他のヨーロッパ文学研究者に向けても、いくらかメッセージを書き加えておきたい。

島田が中米ニカラグアを引き合いに出していたことを思い出してほしい（島田が1941年の時点で念頭に置いていたのはルベン・ダリーオであったと考えられる）。20世紀中南米のスペイン語・ポルトガル語圏文学には、「外地の日本語文学」（さらには日本周辺の「旧植民地」地域の現代文学）に通じる作物がごろごろ転がっている可能性がある。たとえば、カルシア＝マルケスの魔術的リアリズムの影響は、日本国内よりもはるかにかつての「植民地」地域で顕著である。そうした検証作業は、だれよりも比較文学者の手に委ねられているといつていい。

また、日本と同様、第二次世界大戦での敗北後、広大な版図（戦時下の占領地域を含む）を失ったドイツでは、戦後の日本文学とも親和性のある作品群が一定の存在感を示している。公式的なドイツ史に「植民地主義」という言葉そのものが定着していないこと¹⁵⁾もあって、ドイツ及びオーストリアの周縁地域（とくに、かつてプロイセンやハプスブルク帝国の支配下にあった東欧地域）に対する関心は、独立した「外地文学」のタイプに対する関心として受け止められがちだが、思えば、ケーニヒスベルク（現在のロシア領カリニングラード）の哲学者カントに

せよ、プラハの作家カフカにせよ、彼らはまさに「植民地のエリート知識人」そのものではなかつただろうか。まして、第二次世界大戦後に東方から西へと移り住んだ作家ギュンター・グラスや詩人パウル・ツェラーンなどは、日本語風に言うなら、東方からの「引揚者」以外のなにものもでもなかつた（ツェラーンは、パリで客死）。

戦後の日本では、旧「外地籍」の在日作家たちとともに、旧「外地」出身の日本人が、帰国後、次々に文壇への参入を試みた。細かく名前を挙げだせばきりが無いが、たとえば、日本統治下の大邱^{テグ}生まれで、敗戦とともに過去のものとなったはずの植民地支配を戦後になってからまさにさまざまな「遺制」として呼び覚まそうとした小林勝のような作家は、きわめて興味深い研究対象でありうる。小林には、19世紀のプロイセン領（現在のポーランド北西部）でポーランド人やユダヤ人を足蹴にしたドイツ人の理不尽なふるまいを、時代を遡ってまで告発しようとした『レヴィンの水車』（1964）のボプロフスキを彷彿とさせるような、筋の通った道徳性が宿っているのである。

こうした戦後引揚者の文学は、敗戦国に特有の現象と勘違いされやすいが、脱植民地化のプロセスのなかで「旧植民地」を追放された作家のなかには、カミュなども当然含まれる。戦後引揚者や「旧植民地」系の在日外国人の文学を考えると、ヨーロッパ文学に見られる近似的な例を念頭に置くことは有益だろう。そうすることで、西洋諸列強の「外地文学」を「外地の日本語文学」として横領的に読むという夢のような可能性が拓けてくる。読み方さえ変えれば、『異邦人』は、フランス語で書かれてはいても、日本語でだって書かれえたかもしれない植民地文学であり、『レヴィンの水車』も同じく、日本語で書かれてもおかしくなかつた引揚者文学として十分に読めるのである。あるいは、中西伊之助や小林勝をフランス語文学やドイツ語文学として読んだ気になることだって思うがまだ。

グローバル化の時代と呼ばれるこの時代、比較文学はますます各国文学同士の「比較・対照」だけでは片づかなくなっている。そして、日本の比較文学者が日本の植民地主義に正しく^{あい}相対するためには、アジアの言語に習熟するだけでは足りない。それこそ、かつて世界制圧の野心を抱いた西洋諸列強の文学とのあいだにさまざまな類似や相同性を見出しながら、全地球的な規模での植民地主義の「清算」に関与しなければならぬのである。それは文学史研究の課題であると同時に、かつての「遺制」をまだまだひきずっている現代文学を読むときの正しい作法でもあるはずである。

注

- 1) この方面では、酒井直樹の仕事が突出している。酒井は、ICLA 東京大会（1991）で、テレサ・ハッキオン・チャを比較文学的にあつかうときの作法について語った（Naoki Sakai, "Distinguishing Literature and the Work of Translation: Teresa Hak Kyung Cha's *Dictée* and Repetition without Return", in *Translation and Subjectivity: On Japan and Cultural Nationalism*, Univ. of Minnesota Press, 1997——日本語版は、宇野田尚哉・松井美穂訳「「文学」の区別、そして翻訳という仕事—テレサ・ハック・キョン・チャの『ディクテ』と回帰なき反復」として、『日本思想という問題——翻訳と主体』岩波書店、1997に所収）。また、論文「多民族国家における国民主体の制作と少数者マイノリティの統合」（『岩波講座：近代日本の文化史⑦総力戦下の知と制度』岩波書店、2001）で、酒井は、第二次世界大戦への戦時動員を描いた日系アメリカ作家のジョン・オカダと台湾人日本語作家（陳火泉、王昶雄）を同じ土俵に乗せて「比較・対照」

するという鮮やかな着想を実行に移している。

- 2) 金素雲（訳編）『朝鮮詩集』（岩波文庫、1954）p. 228。
- 3) 現在、韓国では日本統治下の日本語表現者に「二重言語」のレッテルを貼ることが慣例になっているという。たしかに、植民地の二重言語状況^{ダイグロシヤ}のなかで、現地人表現者は、まさにバイリンガルの特権として、二つの選択肢のなかから、時として日本語を選び取ったのであり、逆に、植民地在住（もしくは植民地生れ）の「内地人」表現者は、そのような選択肢を自分につきつけないままだった。この非対称性こそが、植民地主義的な言語的ヘゲモニーの証であり、帰結である。なお、先の『朝鮮詩集』（注2参照）に列なる一種の「古典」として、岩波文庫は、同じく日本語の圧力下で「廃滅」の危機に瀕していたアイヌ語の口頭伝承をアイヌ系日本人である知里幸恵が選ばれて「編訳」した記念碑的な著作である『アイヌ神謡集』（1923）を再刊した（1978）が、同書の持つ歴史的な意味については、西成彦・崎山政毅（編）『異郷の死——知里幸恵、そのまわり』（人文書院、2007）を参照されたい。かつて「アイヌモシリ」であった北海道一帯は、近代日本にとって最初の「外地」であったと考えられる。
- 4) 日本の英語圏文学研究者が日本の植民地主義を批判的にふりかえった試みとしては、齋藤一の『帝国日本の英文学』（人文書院、2006）が先駆的である。また佐野正人の「佐藤清・植民地的な主体として——植民地・京城帝大・英文学」（筑波大学文化批評研究会（編）『〈翻訳〉の圏域——文化・植民地・アイデンティティ』2004）は日本の英文学者・比較文学者にとってアイデアの宝庫であると思う。
- 5) イ・ヨンスク「アジアの植民地から読むアルベール・カミュ」（『異邦の記憶——故郷・国家・自由』晶文社、2007）。「多くの研究者を擁し、豊かな蓄積のある日本のフランス文学研究が、カミュをどのように読んできたかを知りたい」（p. 38）という彼女の挑戦的な言葉を正面から受け止められる日本人研究者はいるだろうか。
- 6) この用語の定着にあたっては、黒川創（編）の『〈外地〉の日本語文学選』（全3巻、新宿書房、1996）が大きくあずかって力があつた。
- 7) この作品が単行本『霧社』として刊行され、あらためて広く人々の注目を浴びようになるのは、100人を超える日本人死亡者を出し、その後、日本軍および総督府側の報復行動によって「台湾原住民」側に自殺者を含め、700人にも及ぶ死者を出した衝撃的な「霧社事件」の余韻が残る1936年のことであつた。
- 8) 「不逞鮮人」（黒川創（編）『〈外地〉の日本語文学選③朝鮮』新宿書房、1996）p. 33。
- 9) 二人の類似は、基本的には表面的なものである。アナーキズムに傾倒していた中西は、日本の植民地支配を罪深いものだと認識し、「不逞鮮人」では「すべては自分達民族の負うべき罪だ」（前掲書、p. 73頁）と書いて小説をしめくくっている。逆に、カミュに植民地主義の恩恵をこうむった側の道義的責任を引き受けようという思想的・心情的な倫理観は乏しい。彼は裁判制度や死刑制度を「不条理」という人類に普遍的な問題に回収させてしまったのである。したがって、この二人の作家は決して相似をなしてはいないのだが、それならば、私たちは、カミュを日本の植民地から頭角をあらわしたかもしれない日本語作家として、中西をフランス植民地の経験が豊かだったフランス語作家として、同一平面で交叉的に読む空想的な読書法を身につけるといふ別の方法があるのではないか。
- 10) 島田謹二『華麗島文学志——日本詩人の台湾体験』明治書院、1995、p. 471。
- 11) 前掲書の「あとがき」のなかで、平川祐弘は「島田教授は日本敗戦後十数年が経った時、丸善石油に〔中略〕『華麗島文学志』の出版助成金を申請し、学界にその申請を強くバック・アップする碩学がいて、その交付を受けたことがあつた。しかし、当時は出版界にまだその機が熟していなかったためか、公刊することなくて終わった」（p. 484）と書いている。
- 12) 橋本恭子の一橋大学大学院での博士学位請求論文『『華麗島文学志』とその時代——比較文学者島田謹二の台湾体験』は、今後、比較文学者・島田謹二を語るときに避けては通ることのできない重要な先行研究となるだろう。
- 13) この方面では、『抵抗への招待』（みすず書房、1997）の鶴飼哲や、『〈他者〉としての朝鮮——文学的

考察』（岩波書店、2005）の渡邊一民などの仕事が、フランス周辺と日本周辺をつなぐポストコロニアルな思考スタイルを模索する試みとして評価されている。

- 14) マムリ『現代アラブ小説全集⑩阿片と鞭』菊池章一（訳）、河出書房新社、1978。同書の巻末にエッセイを寄せた金石範は、「原作はフランス語で書かれているという。〔中略〕作者マムリのある苦衷が想像できるような気がする」（p. 420 頁）と書いている。「旧植民地」出身者でかつ「旧宗主国」の言語で書く作家の「苦衷」への注目は、まさしく在日日本語作家ならではのものであると思う。
- 15) この状況に抗するかのようには、日本のドイツ文学者のなかでは、『ファシズムと文学——ヒトラーを支えた作家たち』（白水社、1978）において、ファシズム期ドイツの国内文学はもとより、ドイツ人海外植民者の文学をまで射程に入れた池田浩士が、その後、湯浅克衛をはじめとする「外地の日本語文学」（それを池田は「海外進出文学」の名で呼んで、日本ファシズムに迎合した内地日本人の文学に絞って検証の目を向ける独自の方法を切り拓いた）の研究においてもパイオニア的な仕事を積み重ねつつある。『「海外進出文学」論・序説』（インパクト出版会、1997）ほかを参照されたい。池田が照準をあてるのは、東西二つの植民地主義とファシズムとの共犯性の問題である。